

福祉系 対人援助職養成の 現場から^{③③}

西川 友理

ちゃんとしなさい！

「ちゃんとしなさい」や「きちんとしなさい」という言葉は、子どもに伝わらない言葉だとよく言われます。

「ちゃんと」や「きちんと」は何をどうすることなのか、具体的にどうすればいいのか、子どもにとってみればよくわからないからです。

「机の上をふきんでふいておいてね。」
「ハンカチを全部たたんで、引出しの中に入れておいてちょうだい。」

「お客様がいらっしゃったら、こんにちとは挨拶をして、静かにブロックで遊ん

でいてね。」

このように伝えれば、何をどのようにしてほしい、と言われているのか、小さな子どもにもよくわかります。

そんなことはわかっていたはずなのに、施設職員であった頃の私は、一時期、こう思っていました。

「私、もっとちゃんとしなきゃ。子どもに関わる専門職なんだから！」

ちゃんとした大人

子どもに関わる専門職は、ちゃんとしていないといけない、だから私自身が、そうあらねばならぬ、と思っていたのでした。だから、そうではない自分を責めていました。

一方で、「ではどうすれば“ちゃんと”していることになるのか」は、はっきり解っていなかったのです。きちんとしたマナーをわきまえていて、世間的なルールや常識があって、精神的に強く、理性的で博学で、正しいことをして…そんな人だろうか。果たしてそれで「ちゃんと」しているのだろうか。どれも満たせそうにない、そしてどれも正解ではなさそうで…。

それにもかかわらず、なんとか「ちゃんとする」ことを目指して、手探りで日々の自分の在り方を探していました。

しかし、ある時ふと気づきました。

「ちゃんとしなければならぬ、理由は何だ？」と。

子どもの見本や手本にならないといけないからだと思いました。しかし、どんな姿が見本や手本になるのか、わかっていないではないか、と自らに問いかけました。

それはつまり、「こうありたい」の明確な姿がなく、「見本でありたい」と思っているだけではないか。「ちゃんと」という言葉は、「こうありたい、こうあらねばならぬ」と自らが作り出した虚像に過ぎないのではないか。目の前の子どもを勘定に入れずに、「まず自分がこの環境で、どういう自分でいたいか」→「子どもの見本でいたい」という自己満足を目指しているだけなのではないか。

今考えると、そんなにちゃんとした大人でないといけないと思ったのは、自分の子どもとのかかわり方に、自信がなかったためであろうと思います。経験も浅く、運動神経も悪く、知識もなく、取り立てて特別な才能も持っていない自分が、相手との関係の中でどうすれば不安を感じずにいられるだろうか…そのような感情があったためではないかと思うのです。

それに気付いた時、「ちゃんと」あるうとする無意味さ、空しさを感じ「ちゃんとしたい」私を手放しました。

今、保育士という子どもに関わる専門職を養成する立場になり、改めて、子どもに関わる大人は、どんな人であるべきなのか、と、考えることが増えました。

私が子どもの頃、身の回りに居た大人

私が子どもだった頃を思い返してみると、それはもう様々な大人が身の回りにいました。

家族や親戚をはじめ、同じ町内のおじさんやおばさん、友達の家族、図書館の司書さん、児童館や子どもの遊び場のお姉さんとお兄さん、習い事先の先生、お店の店員さん…。

基本的に、皆優しく、元気でした。

でも、時々、ヘンな人もいました。

小学校の時に、1年間担任を持っていた A 先生。理科の時間に、「月の高さが日々移り変わることを調べる方法を考えてきなさい、ただし教科

書や参考書などで測り方を調べずに、自分の頭で考える事」という宿題を出されました。問題はそれだけ、ノーヒントです。

「そんなん、わかるわけないやん！」

「しかも調べたら駄目、って、どうせえっちゅうねん…」

クラス中で、ぶうぶう文句を言いました。

「今までの先生みたいに、ちゃんと教えてよ、先生！」

でも、先生は教えてくれません。

皆の考えてきたトンチンカンな答えを聞いて、楽しそうに笑っています。

そのように、時々ヘンな課題を出して、私たちが困っているのを見るのが好きな先生。どちらかというと、“ヘンな人”だと思っていました。

もう 30 年位前の話ですが、今思い返せばわかります、あの先生は昨今流行りの「アクティブラーニング」をしようとしていたのです。そして、それについて行けていない私達だったのです。

習熟度という点では十分マッチングしていたとは言い切れない点があったものの、いい授業をしようとしてくださっていたのだなあ、と思います。

これも同じく小学校の頃、町中をふらふらしているおっちゃんがありました。

どんな子どもにも人懐こく話しかけていくおっちゃん、平日の昼間からふらふらしていて、何の仕事をしているかわからない人でした。何となく皆が読んでいた名前がありましたが、それも本名かどうかはわかりません。どこに住んでいる人なのかもわかりません。

男子は時々このおっちゃんをからか

っていたようで、ある時、

「あのおっちゃん、ちょっとからかったら、本気で追いかけて来よったけれど、逃げ切ったった！」と、やんちゃ系の男子が自慢げに話しているのを聞いたことがあります。

女子はなんとなくこの人を避けていたのですが、それは得体が知れない人であったからであって、嫌いな人というわけではありませんでした。大人はなんとなくその人の話をするのを避けているように感じていました。

「なんか変な人」「何の仕事をしているかわからない人」「〇〇町の方に住んでいる？らしい」「子どもは好きなようだ」ということで、なんとなく私の通っていた小学校区の有名人でした。

私が中学 2～3 年生の時にいなくなりました。あの人はいったい何だったのか、今でもよくわかりません。

でも「何かよくわからない大人」がいて、その人がその町の中になんとか存在することを大人たちが許しているという環境を維持できている、というのは、なかなか包容力がある地域だったのではないかと思います。

今の時代では、不審者扱いされ、PTA 専用の一斉メールで、通報されていたに違いないおっちゃんでした。

私の近所にはいわゆる「部落差別」が残っていました。祖父は、私がその地域に住む友人宅に遊びに行くと聞くと、大変強い調子で叱りました。学校の道徳で同和教育を受けていた 10 歳にもならない私には、祖父の生きてきた歴史に思い

をはせ、うまく立ち回ったり嘘をついたりということは出来ず、ただもう真正面から怒鳴りかえしていました。

今思えば、あれは祖父とケンカをしたというよりは、祖父の生きてきた歴史とケンカをしていたようなものだとわかります。祖父は私の事を心配してくれていただけなのだという事も分かります。

子どもに関わる大人

こうして振り返ってみると、意図的に傷つけようとする人や、犯罪に巻き込もうという人でなければ、子どもの生活に関わる大人はどんな人がいてもいい、むしろ多様な大人がいる社会の方が、健全だと感じます。そこから何を感じ取り、何を考えるのかは、それこそ子どもによって多種多様です。

さらには冷静に考えてみると、これは何も子どもだけに限った話ではなく、大人にもあてはまる事だなと改めて気が付きました。意図的に攻撃してくる人や、犯罪に巻き込もうとする人でなければ、どんな人がいる社会でもいい。

子どもに関わる福祉系専門職

では子どもに関わる大人の中でも、特に“福祉系専門職”の場合は、どうでしょうか。

昔の私が思い込んでいたように「ちゃんと」しないといけないのでしょうか。

ミラーソンは1964年に、専門職の条

件として①公共の福祉という目的②理論と技術③教育と訓練④テストによる能力証明⑤専門職団体の組織化⑥倫理綱領、を挙げています。これらの条件は、わが国の福祉系専門職のシステムを作る時に、大きく影響したとされています。

わが国の福祉系専門職は、①公共の福祉を目的とした職業でありますし、②理論や技術を③教育、訓練され、また資格取得後も引き続き自己研鑽を重ねることが求められています。また、⑤専門職団体は組織化され、その専門職を名乗るためには④国家試験をクリアすることで、その名称を名乗ることが出来ます。そして専門職ごとに⑥倫理綱領が示され、専門職として大切にすべき価値観が提示されています。

これらを踏まえると、保育士や社会福祉士などの“専門職である”ということであれば、意図的に子どもを傷つけようとする人や、犯罪に巻き込もうという人でなければ、もう充分「専門職として子どもと共にいる人」という条件を満たしていると言えるのではないかと、思い至りました。

“専門職としてのあるべき像”の条件に、たとえば「優しい人」「強い人」「思いやりのある人」などの人格や性格を入れると、それはその人の、人としてのあり方を規制するようなものであり、果たしてそこまで言及してよいのかと疑問を感じます。あまつさえ「ちゃんとしている人」なんて、誰がどう判断するのか、と考えると…。それぞれの資格の倫理綱領には価値観が規定されています。これで充分ではないでしょうか。

それでも、 子どもに関わる福祉系専門職に 必要だと思ふ条件

ただし色々考えていくと、一つだけ、子どもに関わる福祉系専門職に必要ではないかと思ふ条件を思いつきました。

それは「自分が常に正しいと思わない」という姿です。

なぜなら、世の中は移り変わるものであり、現実には多様であるためです。

世の中には様々な考えを持った人や、思いもつかない生活をしている人、自分と全く違う文化で育った人がいます。ですから、自分が考えている事、想像している事は、常に正しいとは言えません。

また、支援する相手が子どもという社会的に弱く小さいとされている立場の人間ならば、つい無自覚にこちらの正しさに相手を合わせようとしがちだからです。

専門職倫理という所から軸足を離さずにいるならば「子どもにはこう接すべき」や「子どもと接する時にはこれが大切」という個々人の信念や方針はどんなものであってもいいと思ふのですが、「それは本当にそうだろうか」と常に自らに問いかける姿勢と、時には自らの信念や方針を変える勇気や柔軟性を持っている事が必要だと思ふのです。

それは、自らが守るべきとされている倫理綱領に対してすら「本当にそうだろうか」と問い直す姿勢でもあり、そうすることで、その専門職の倫理的な自浄が図られるのではないのでしょうか。

そして私の信念・方針

私が今、自分なりに考えている「子どもにかかわる専門職が大切にすべきもの」は「自ら機嫌よくいること」です。

今私が住んでいるこの社会は「大人はしんどい」「大人はズルい」「大人はうそつきだ、汚い」と、大人になる事に対してネガティブメッセージにあふれているように感じます。

ところが子どもはいずれ何をどうしても、事故や病気で若くして亡くならない限り、大人になります。これから行く先は「つらく、しんどく、汚い世界である」ということを彼らに伝えることに、いったい何の意味があるのか、と思ふのです。

それよりも、「この社会は生きるに足る、信じるに足る社会である」「基本的に楽しく、元気で生きていきやすい場所である」「大人になるということは、こんな素敵な社会の、サービスを受けるほうではなく、サービスを作るほうの側に立つ人になれる」と伝え、そして子ども達がそれを実感として感じられる環境であるようにすることのほうが、よほど前向きに、生きていけるのではないのでしょうか。そのためには、まずは大人として、機嫌がよい私でいようと思ふのです。

その上で、

「でも、本当にそれだけでいいのかな、と、疑ってかかっている気持ちもあるんだよ。絶対に私が正しいってわけでもないし。ところで、あなたは思う？」

と、子どもに、そして自分自身にも、問いかける姿でありたいと思ふのです。